

編集後記

二村 聡 福岡大学医学部病理学講座

1966(昭和41)年の4月に村上忠重先生の発案で刊行された本誌「胃と腸」は、2015(平成27)年でついに50周年を迎えます。ややシアン調の青色背景に白文字で“胃と腸(当時は胃の文字が腸よりも大きい)”と印刷された本誌は、消化管疾患診断学の発展に深くかかわった先輩方により精力的に企画・編集されてきました。当時はモノクロでありながら、驚くほど美しい画像や図表が掲載され、著者の息づかいすら聞こえてくるとの定評がありました。丹精込めて執筆するあまり、主題論文は年にひとつが精一杯であったとも聞き及んでおります。この原著形式は、今も論文執筆のよきお手本となっていることは申すまでもありません。

さて、本誌刊行以来、10年、20年、33年、40年の各節目に「歩みと将来展望」を企画してきました。今回、長らく本誌の企画・編集にかかわってこれた八尾恒良先生と渡辺英伸先生を迎え、鶴田修編集委員長と小生(二村聡)の計4名で企画を練り上げました。

その結果、原点に回帰し、本誌の真骨頂である消化管(食道、胃、大腸)早期癌の診断学に特化し、その時代変遷を俯瞰することをテーマとしました。消化管早期癌の診断学において、大きく変わったものは何か、変わっていないものは何か、そして、今後も安易に変えてはならないものは何かといった命題について、それぞれの立場から意見を述べていただくことにしました。

どなたも本誌50年の歴史とご自身の学術的経験を踏まえて、含蓄のある文章を寄稿してくださいました。ご執筆に非常な労力と時間を要されたであろうことは一目瞭然です。厚く御礼申し上げます。私どもは著者に敬意を表し、背筋をびんと伸ばして精読・再読すべきであります。

まず、八尾恒良先生による序説の“本誌の早期癌診断学の歴史は…病理診断に頼りながら臨床も進歩する、良性サイクルの歴史とも言える”というくだりは、臨床医と病理医の最も理想的なかわり合い方を端的に言い表しています。双方の対話がなくなるといふ最悪の事態は今後も絶対に回避せ

ねばなりません。この点は座談会でも繰り返し述べられています。次に、吉田操先生は、食道早期癌が粘膜癌と定義されるまでの長くて険しい道のりを先人の偉功とともに紹介なさっています。それから、芳野純治先生は、昨今の診断技術、使用機器の進歩を踏まえたうえで、現行のスクリーニング法、壁深達度診断、範囲診断における問題点や今後の課題を述べられています。4ページにわたる年表は早期胃癌診断学の歴史を俯瞰するうえで欠かせません。そして、多田正大先生は、膨大な関連資料と悪戦苦闘の末、早期大腸癌診断学の歩みについて丁寧かつ鮮やかな筆致で解説してくださいました。最後に、渡辺英伸先生は、世界の情勢を視野に入れながら消化管腫瘍の病理診断学の歩みから日欧米間の癌診断基準の違いまで、静かにしかし熱く語ってくださいました。結びの「得るものが多かった反面、新しい道具への依存・過信、過剰情報の盲信で…自分の五感を使いながら観察する機会が失われているように感じます」というくだりは、たいへん重く受け止めるべき警笛であります。

特別座談会は新進気鋭の方々にご参集願ひ、約4時間にわたり、消化管早期癌診断学の現状といくつかの問題点について本音を吐露していただきました。議論も尽きず、時間も足りず、十分に討議できなかった領域もありましたが、個人的には消化管早期癌診断学のあり方を謙虚に再考するよい機会になったと確信しています。

最後に、誤解をおそれずに申し上げると、本誌50年の歩み・歴史を振り返ることは、先人の教え、思想を誤解、曲解せずに引き継ぐことに他なりません。歴史を俯瞰する際、その時代に起こった“事実”のみならず、そのときその裏で先人は何を根拠に、何を考え、何を決断したのかといった諸々の“背景”についても正しく整えて理解する必要があると考えています。

本号が読者諸兄諸姉の立ち位置を冷静に俯瞰するための、最も優れた手引書となることを切に望み、編集後記といたします。